国立研究開発法人
水産研究・教育機構

プレスリリース

２０２３年７月３１日
国立研究開発法人 水産研究・教育機構

２０２３年度 第１回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2023年8月～12月）のポイント

海況

黒潮はA型(※1)基調で推移する。

沿岸水温は、潮岬以西は「平年並」(※2)～「高め」(※2)、熊野灘～遠州灘～相模湾は「平年並」～「高め」で暖水波及時に「極めて高め」(※2)、伊豆諸島海域は概ね「高め」～「極めて高め」、房総～常磐南部海域は「平年並」～「高め」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する
A型：流路南端が北緯32度以南

※2 平年並＝平年値±0.5℃程度、高め・低め＝平年値±1.5℃程度、極めて高め＝平年値＋2.5℃以上。
ただし、鹿島灘～常磐南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

漁況（来遊量予測）

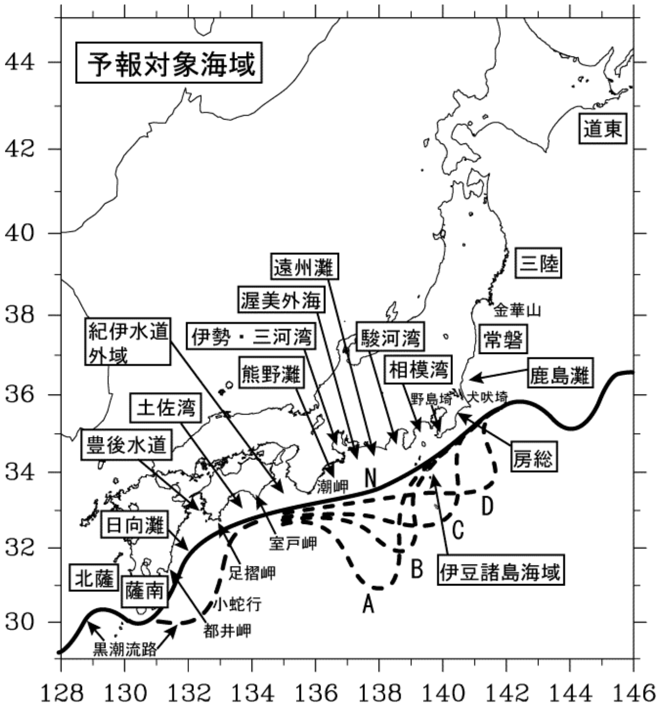
マイワシ
相模湾以西では低調であった前年並～上回る海域が多く、房総以北では前年並。

カタクチイワシ
依然として低水準であるが、房総以北では前年を上回る。

ウルメイワシ
全体として前年を上回るが、紀伊水道外域では前年並。

マアジ
相模湾では前年を上回り、熊野灘以西では前年並～下回る。

マサバ・ゴマサバ
マサバは低調であった前年並、ゴマサバは前年を上回る海域が多いが低水準。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
担当　企画調整部門（横浜）　上原
　　　漁況：浮魚資源部（横浜）　福若、由上、安田、上村、井元、渡部、木下
　　　海況：海洋環境部（横浜）　栗田、安倍
電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL
https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2023年8月～12月）

(1) 黒　潮　（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

・都井岬沖では、離岸傾向で推移する。

・足摺岬～潮岬沖では、離岸傾向で推移するが、一時的に接岸する。

◎潮岬以東

・大蛇行が継続し、A型基調で推移する。

・蛇行北上部は、概ね伊豆諸島海域の西側に位置する。

・房総沖では、接岸傾向で推移するが、一時的に離岸する。

(2) 薩南～房総海域

・都井岬～潮岬沖は、一時的に黒潮系暖水の影響を受ける。

・熊野灘～遠州灘～相模湾は、黒潮の接近や黒潮系水の波及に伴い概ね暖水に覆われる。

・伊豆諸島海域は、概ね暖水に覆われる。

・房総沖は、黒潮による暖水に覆われやすい。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

・黒潮から暖水が波及しやすい。

(4) 沿岸水温

・潮岬以西は、概ね「平年並」～「高め」で推移する。

・熊野灘～遠州灘～相模湾は、「平年並」～「高め」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。

・伊豆諸島海域は、概ね「高め」～「極めて高め」で推移する。

・房総海域～常磐南部海域は、「平年並」～「高め」で推移する。

※　平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上
（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並＝平年値±1.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.6～3.9℃程度、
（高め、低め）＝平年値±4～6℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±6.1℃以上）

経　過（2023 年 3 月～2023 年 7 月）　（注：経過は図 2 を参照のこと）

(1) 黒　潮

・A 型流路の大蛇行が継続した。

・3 月～4 月にかけて、都井岬沖で小蛇行が発達した。

・3 月中旬～6 月中旬にかけて、小蛇行の発達や大蛇行部の西偏に伴い、都井岬～室戸岬沖で大きく離岸した。

・5 月中旬～7 月上旬にかけて、蛇行北上部が遠州灘沖で S 字状となり、黒潮屈曲部が熊野灘～遠州灘に接近することが多かった。

・7 月上旬～中旬に遠州灘沖まで北上した後、再び南下して八丈島の南側を通過し、W字状の流路となった。これに伴い、野島埼沖で一時的に大きく離岸した。

・鹿島灘～常磐沖の北上が継続し、6 月下旬～7 月にかけて北緯 40 度付近に達した。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

・黒潮北縁は、3 月は「接岸」、4～5 月は屋久島南付近の平均的な位置、6 月は「接岸」、7 月は平均的な位置で推移した。

◎潮岬以西

・都井岬沖では、黒潮は概ね離岸傾向で推移した。

・足摺岬沖では、黒潮は 3 月上旬～中旬と 6 月下旬に「やや離岸」となった以外は、「かなり離岸」～「著しく離岸」で推移した。

・室戸岬沖では、黒潮は 3 月上旬～下旬に「やや離岸」～「かなり離岸」、その後は「著しく離岸」で推移した。

・紀伊水道外域では、4 月以降、黒潮内側反流の影響が時折みられた。

・潮岬沖では、黒潮は「著しく離岸」で推移した。

◎潮岬以東

・5 月下旬～7 月上旬、遠州灘において蛇行北上部が S 字状となり、熊野灘～遠州灘に接近した。

・駿河湾、大島西水道へ向けて断続的に暖水が波及した。

・黒潮は、3 月～6 月下旬、御蔵島付近を北東～東向きに流れたが、7 月上旬～中旬、八丈島の南側を通過した。

・房総沖では、3 月上旬の犬吠埼沖と 7 月上旬～中旬の野島埼沖で一時的に離岸した以外は、接岸傾向で推移した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

・黒潮系暖水の影響を大きく受けた。

現　況（2023 年 7 月 26 日現在）

(1) 黒　潮

・A 型流路であり、大蛇行が継続している。

・足摺岬沖で大きく離岸した後、大王埼沖で 29°30’N付近まで南下している。

・御前崎沖を北上した後、御蔵島付近を北東に流れている。

・犬吠埼沖を北上し、三陸沖まで達している。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

・黒潮北縁は、屋久島南付近の平均的な位置にある。

◎潮岬以西

・黒潮は、都井岬～足摺岬沖で「かなり離岸」している。

・黒潮は、室戸岬～潮岬沖で「著しく離岸」している。

◎潮岬以東

・熊野灘～遠州灘に、黒潮系暖水がみられる。

・伊豆諸島海域は、暖水に覆われている。

・黒潮は、野島埼沖で「やや離岸」している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

・黒潮からの暖水の影響がみられる。

※　黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

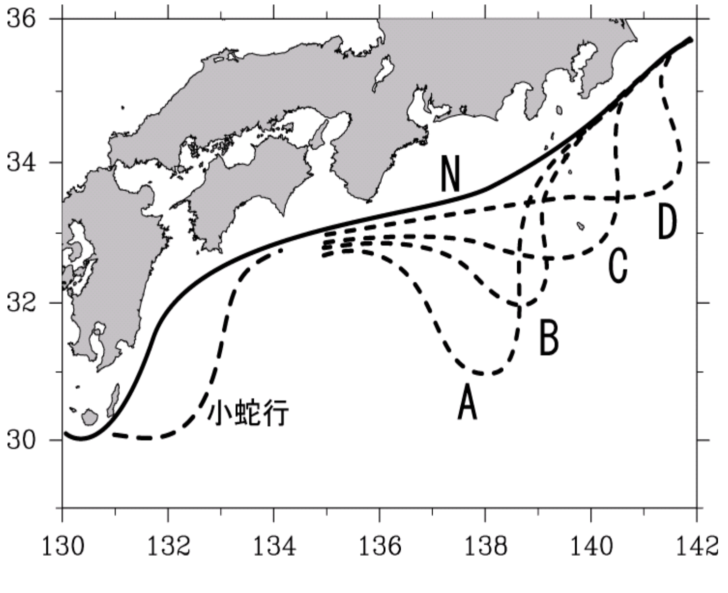


図１　黒潮流型の分類

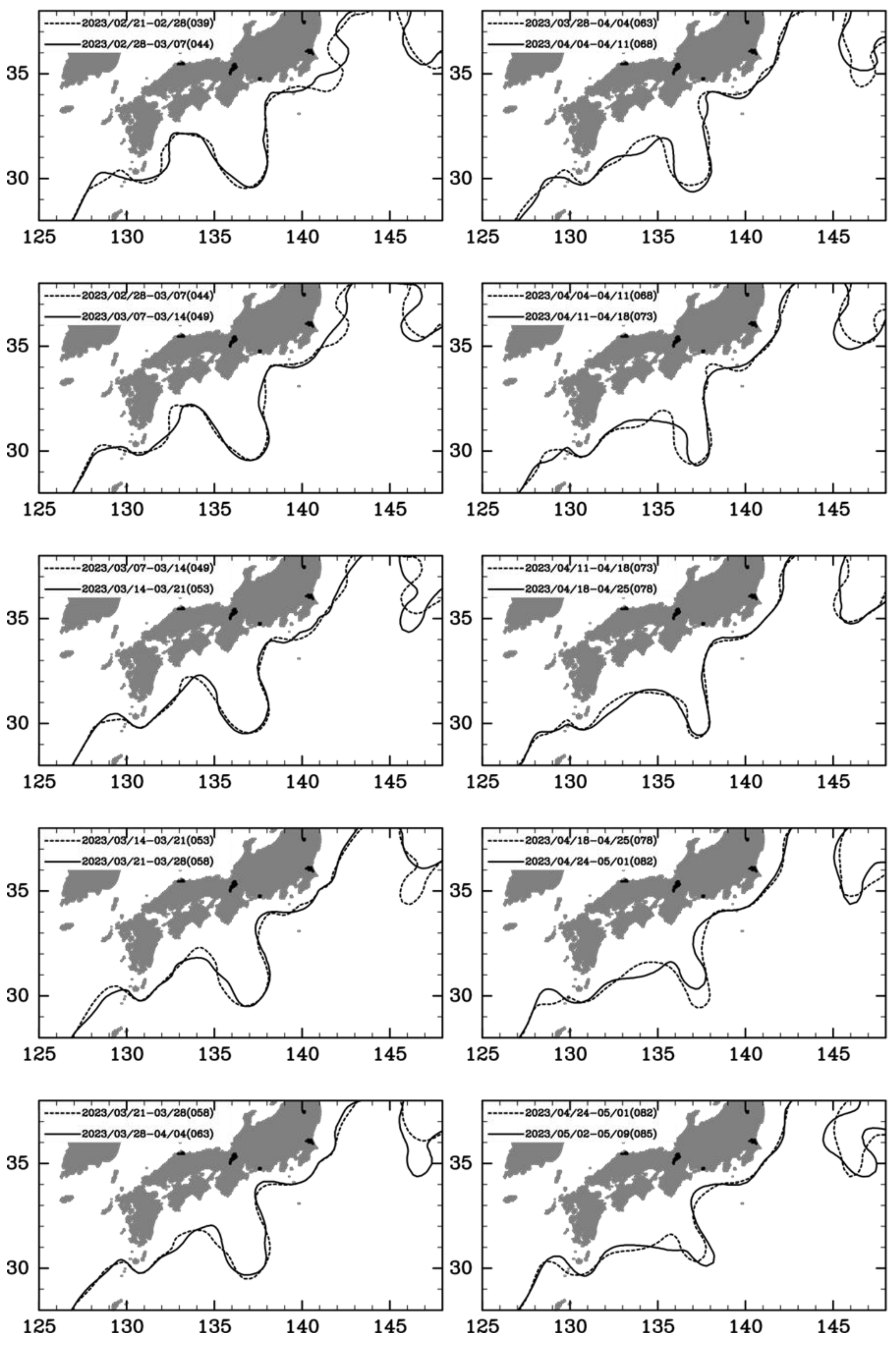


図２　黒潮流軸のパターン

（2023 年 3 月～7 月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成）

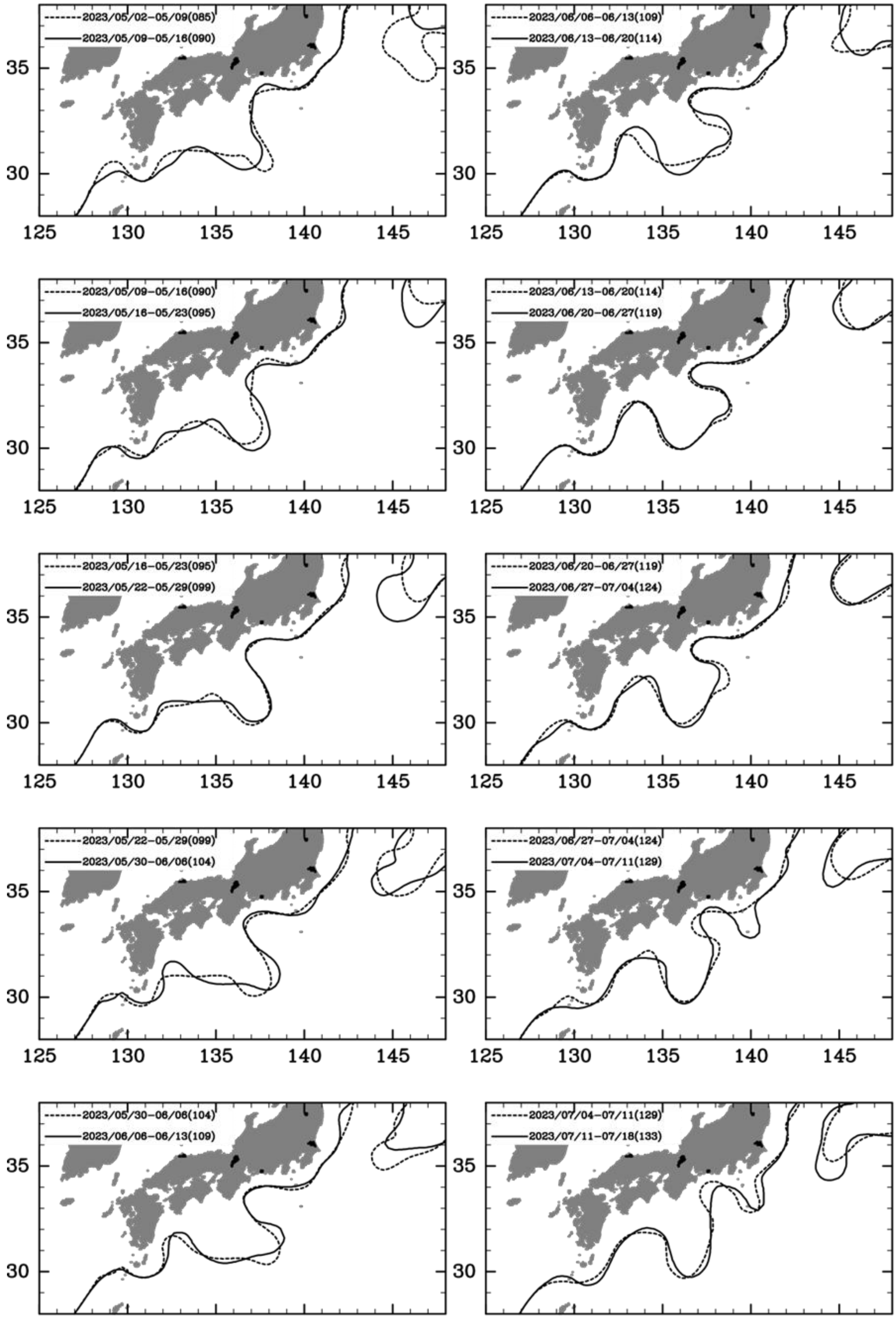


図 2（つづき）　黒潮流軸のパターン

（2023 年 3 月～7 月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成）

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2023 年 8 月～12 月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域
対象漁業：まき網、定置網、船曳網
対象魚群：0 歳魚（2023 年級群）、1 歳魚（2022 年級群）、2 歳魚（2021 年級群）、3 歳魚（2020 年級群）、4 歳以上（2019 年級群以上）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）
（1）来遊量：北薩海域～日向灘では前年を上回る。豊後水道南部では低調だが前年を上回る。宿毛湾では前年を上回る。紀伊水道外域では前年並。熊野灘では低水準。
（2）漁　期：期を通じて漁獲される。
（3）魚　体： 8 ㎝～16 ㎝前後の 0 歳魚主体に漁獲され、16 ㎝以上の 1 歳以上が混じる。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）
（1）来遊量：伊勢・三河湾では前年を下回る。駿河湾～相模湾では前年並。
（2）漁　期：期を通じて漁獲される。
（3）魚　体：10 ㎝～15 ㎝前後の 0 歳魚主体に漁獲され、15 ㎝以上の 1 歳以上が混じる。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）
（1）来遊量：前年並。
（2）漁期・漁場：まき網は、8 月～10 月は道東海域が主漁場となり、房総海域は小規模な漁場形成となる。11 月～12 月には三陸海域に散発的な漁場が形成される。定置網は、各地で期を通じて散発的に漁獲されるが、12 月以降に本格化する。
（3）魚　体：9 ㎝～14 ㎝前後の 0 歳魚、14 ㎝～18 ㎝前後の 1 歳魚、15 ㎝～18 ㎝前後の 2 歳魚、16 ㎝～20 ㎝前後の 3 歳魚、18 ㎝以上の 4 歳魚が漁獲される。

漁況の経過（2023 年 4 月～6 月）および見通し（2023 年 8 月～12 月）についての説明

1.　資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980 年代は 1,000 万トン以上の高い水準で推移したが、1990 年代に入って急減し、2002 年以降 2009 年まで 10 万トン前後の低い水準で推移した。その後、比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2014 年には 100 万トンを上回った。その後も良好な加入が続いたことにより資源量はさらに増加して、2021 年は 443 万トンと推定された(2022 年度資源評価)。

2019 年級群（4 歳魚）は、加入量が 550 億尾と推定されており、最近 10 年（以下、近年）において最も高い加入量（880 億尾）と推定された 2018 年級群を下回るものの、比較的高い値となっている。2022 年における 3 歳魚としての漁獲状況は前年を下回った。2019 年級群の推定残存資源量は前年を下回る水準であるものの、近年の高水準を維持している。

2020 年級群（3 歳魚）は、加入量が 697 億尾と推定されており、2019 年級群を上回る値となっている。

2022 年における 2 歳魚としての漁獲状況は前年並であった。2020 年級群の推定残存資源量は、2019 年級群の同時期を上回っている。

2021 年級群（2 歳魚）は、加入量が 617 億尾と推定されており、2020 年級群と同程度の加入水準となっている。2022 年における 1 歳魚としての漁獲状況は前年並であった。2021 年級群の推定残存資源量は、2020 年級群の同時期と同程度である。

2022 年級群（1 歳魚）について、2022 年における 0 歳魚としての漁獲状況（主に西日本海域）は、前年を下回っていた。一方、沖合域においては、5 月～6 月の移行域幼稚魚調査（水産資源研究所）において前年並の CPUE（Catch Per Unit Effort：単位努力量当たり漁獲量）が見られ、9 月～10 月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所）に基づく加入量指数も前年並となった。ただし、6 月～7 月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所）においては、近年の高水準は維持するが前年を下回る CPUE となった。現時点では不確実であるが、近年は沖合回遊群が資源の主体となっていることを踏まえ、2022 年級群の加入量は前年並の水準と考えられる。

2023 年級群（0 歳魚）に対応する 2023 年の産卵量は、1,023 兆粒（2023 年 6 月までの暫定値）であり、2022 年（1,423 兆粒）を下回った。マシラスとしての漁獲は、漁獲の中心である渥美外海～駿河湾において、前年を下回っており、西日本の海域における未成魚としての漁獲も、前年を下回っている。沖合域の調査（5 月～6 月の移行域幼稚魚調査と 6 月～7 月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査）では、近年の高水準は維持しているものの前年を下回る漁獲が見られている。これらの情報から現時点では不確実であるが、2023 年級群の加入量は、前年を下回る水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

（1）北薩～熊野灘（まき網、定置網）

北薩～熊野灘での 2023 年 4 月～6 月（以下、前期）の漁獲量は 1,762 トンと前年同期（365 トン）を大きく上回った。特に北薩海域～日向灘において前年を大きく上回る漁獲となっていた。（漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値）

・来遊量：近年の漁獲状況から、今期の主な漁獲対象は 0 歳魚（2023 年級群）であり、1 歳（2022 年級群）以上が混じる。

北薩～薩南海域では、前期の漁獲状況が前年を大きく上回り、当歳魚の加入もみられることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

日向灘では、6 月にまき網でまとまった漁獲があり、前期の漁獲状況は前年を大きく上回ったことから、今期の来遊量は低調であった前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、前期の漁獲状況が前年を上回り、近隣県においても来遊が見られていることから、今期の来遊量は低調であった前年を上回ると予測される。

豊後水道中南部東側では、0 歳魚が漁獲の主体となる。本海域において、前期の漁獲状況が前年同期をやや上回っていたことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、0 歳魚および 1 歳以上が漁獲される。前期のシラス漁の漁況から 0 歳魚の発生は前年と同様に低水準と考えられるが、中型まき網の漁況は前年を上回っていたことから、今期の来遊量は前

年を上回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、成魚を漁獲する漁業が少ないため、漁況から来遊量を予測することは難しいが、近年の傾向から来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、8 月～12 月の 1 そうまき網での漁獲量は少ない傾向にあり、前期の棒受網の漁獲量も少なかったことから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

熊野灘では、3 月と 5 月の主要定置網での漁獲がなく、中型まき網では前期に 0 歳魚がほとんど漁獲されていないことから、本海域への加入量は極めて少ない可能性が高く、来遊水準は低水準と予測される。

・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。

・魚体：近年の出現状況から、主体となる 0 歳魚は 8 ㎝～16 ㎝前後、1 歳以上は 16 ㎝以上。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

伊勢・三河湾～相模湾での前期の漁獲量は 359 トンと前年同期（4,324 トン）を下回った。

・来遊量：近年の漁獲状況から、今期の主な漁獲対象は 0 歳魚（2023 年級群）であり、1 歳（2022 年級群）以上が混じる。

伊勢・三河湾、渥美外海では、前期のマシラスの漁獲量が低調であった前年を大きく下回っていたことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

駿河湾、相模湾西部では、0 歳魚が漁獲の主体となる。5 月、6 月、今期の来遊量は前年並と予測される。

相模湾東部では、前期のマシラス漁獲量が低調であった前年を大きく上回り、近年では豊漁であった 2019 年と同水準であった。ただし、近年はマシラス漁獲量と 8 月～12 月の漁獲量の相関が弱くなっていること、および近年の夏季以降の漁獲状況は低調であることから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。

・魚体：近年の出現状況から、主体となる 0 歳魚は 10 ㎝～15 ㎝前後、1 歳以上は 15 ㎝以上。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

房総以北海域のまき網での前期の漁獲量は 10.3 万トンであり、前年同期（12.9 万トン）を下回った。漁場は犬吠埼周辺海域～常磐南部海域が主体で、6 月中旬からは三陸南部海域、6 月下旬からは三陸北部海域でも形成され、道東海域での本格的な操業が始まっている。房総以北海域の定置網等での前期の漁獲量は 3.6 万トンとなり、前年同期（2.6 万トン）を上回った。

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は、1 歳（2022 年級群）以上が主体となる。0 歳魚（2023 年級群）は、房総海域のまき網と定置網および三陸南部海域の定置網で漁獲される。

資源状態を反映して、1 歳以上の来遊量は前年並と考えられる。漁期終盤に常磐以北で漁獲される 0 歳魚の来遊量は、現状ではかなり不確実であるが、現在得られている沖合域調査の結果から前年を下回る水準と考えられる。一方、房総海域において漁獲される 0 歳魚の来遊量は、前期の漁獲状況および産卵量と黒潮流路の関係から、低調であった前年を大きく上回ると予測される。本海域の漁獲の主体は 1 歳以上であ

ることを踏まえ、全体としての来遊量は前年並と予測される。
・漁期・漁場：近年および直近の魚群の来遊状況から、まき網は、8 月～10 月は道東海域が主漁場となり、房総海域は小規模な漁場形成となる。11 月～12 月には三陸海域で散発的に漁場が形成される。定置網は、各地で期を通じて散発的に漁獲されるが、12 月以降に本格化する。
・魚体：近年の出現状況から、0 歳魚は 9 ㎝～14 ㎝前後、1 歳魚は 14 ㎝～18 ㎝前後、2 歳魚は 15 ㎝～18 ㎝前後、3 歳魚は 16 ㎝～20 ㎝前後、4 歳魚は 18 ㎝以上。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2023 年 8 月～12 月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域
対象漁業：まき網、定置網、船曳網
対象魚群：0 歳魚（2023 年級群）、1 歳魚（2022 年級群）、2 歳魚（2021 年級群）。
年初に加齢。魚体は被鱗体長。

１．西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）
（1）来遊量：西薩～紀伊水道外域では予測が困難。伊勢湾、渥美外海では前年を下回る。遠州灘～駿河湾、相模湾では前年並。鹿島灘～常磐南部海域では前年を下回る。
（2）漁　期：期を通じて漁獲される。

２．北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）
（1）来遊量：北薩～薩南海域は前年並。日向灘、豊後水道南部西側では前年を上回る。豊後水道東側、宿毛湾では前年を下回る。紀伊水道外域では主たる漁獲対象ではない。
（2）漁　期：期を通じて漁獲される。
（3）魚　体：10 ㎝以下の 0 歳魚主体に、10 ㎝以上の 1 歳以上が漁獲される。

３．熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）
（1）来遊量：熊野灘ではまとまった漁獲がないため予測が困難。伊勢・三河湾、渥美外海では前年を下回る。相模湾では前年並。
（2）漁　期：期を通じて漁獲される。
（3）魚　体：10 ㎝以下の 0 歳魚主体に、10 ㎝～14 ㎝の 1 歳以上が漁獲される。

４．房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）
（1）来遊量：房総海域では前年並～上回る。三陸海域では前年を上回る。道東海域では主たる漁獲対象とならない。
（2）漁期・漁場：三陸海域の定置網および 2 そうまき網、房総海域の 2 そうまき網は期を通じて漁獲される。道東海域、常磐～房総海域の 1 そうまき網の主な漁獲対象にはならない。
（3）魚　体：6 ㎝～11 ㎝の 0 歳魚、7 ㎝～14 ㎝の 1 歳以上が漁獲される。

漁況の経過（2023 年 4 月～6 月）および見通し（2023 年 8 月～12 月）についての説明

1.　資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、令和 4（2022）年度資源評価において、2002 年の 291 万トンをピークに減少傾向に転じ、2021 年は 24.7 万トンと推定された。資源動向は親魚量の最近 5 ヵ年の推移から増加傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく、資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

令和 4 年度資源評価に基づくと、2021 年級群（2 歳魚）は加入量が 427 億尾と推定されており、2020 年級群の 344 億尾を上回ったが、高い水準にはない。水産資源研究所が実施している沖合域の調査船調査では、2022 年の推定 1 歳以上の CPUE（全測点の平均 CPUE で暫定値。以下同様）は低く、北西太平洋北上期浮魚類資源調査（以下、北上期調査）と北西太平洋秋季浮魚類資源調査（以下、秋季調査）のいずれにおいて

もCPUEと出現率（暫定値、以下同様）が前年を下回った。以上のことから、2021年級群は低い水準にあると推測される。

2022年級群（1歳魚）は、2022年7月～11月にカタクチイワシシラスや0歳魚として東海海域を中心に漁獲され、0歳魚は前年並であったが、カタクチイワシシラスは前年を大きく下回った。2022年の秋季調査における推定0歳魚CPUEは前年を下回ったが、2023年の北上期調査では推定1歳以上のCPUEは低水準であった前年を上回った。以上のことから、2022年級群の水準は1歳魚時の2021年級群を上回ると推測される。

2023年級群（0歳魚）は、現時点ではその水準を予測することは難しい。2023年1月～6月までの産卵量（I～IV区の合計）は、1,596兆粒と2022年同期（1,179兆粒）を上回り、主要港における4月～6月のカタクチイワシシラス漁獲量は前年並であった。2023年の北上期調査では、推定0歳魚CPUEと出現率は前年を上回った。これらのことから、2023年級群の水準は0歳魚時の2022年級群と同程度か上回ると推測される。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

・来遊量：西薩～紀伊水道外域では、シラスの漁場形成については予測が困難である。

伊勢湾、渥美外海では、4月～6月の漁獲量は前年を下回っており、7月現在、内湾に漁場は形成されていない。5月～7月の親魚の内湾への来遊状況から、今年の来遊親魚量は少ないと推察され、シラスの発生量は少ないと予測されたため、前年を下回ると予測される。

遠州灘～駿河湾では、潮岬～遠州灘西部（伊勢・三河湾内を除く）における5月～6月のカタクチイワシ産卵量（卵稚仔調査）が少なかった年は、7月～8月のシラス水揚量が少ない傾向にある。2023年の産卵量は68兆粒で、前年（91兆粒）を下回り、近年と同様に非常に少ないことから、7月～8月の水揚量は低調であった前年並と予測される。9月以降については、現時点で情報が無いため予測が困難である。

相模湾では、周辺海域（相模湾および東京湾口）で1月～6月に実施した卵稚仔調査では、カタクチイワシ卵の平均採集量は79.7粒であり、前年同期（56.7粒）および過去5年平均（59.1粒）を上回る水準であった。そのため今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

鹿島灘～常磐南部海域では、8月～9月漁獲量は、7月の沿岸10m深水温と負の関係があり、2023年7月の沿岸10m深水温が高めにあることから、8月～9月漁獲量は前年を下回ると予測される。また、10月～12月漁獲量は8月～9月漁獲量と正の関係があることから、総じて、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。

(2) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

・来遊量：北薩～薩南海域では、今期の漁獲主体となる0歳魚（2023年級群）は、4月～6月の水揚量が前年並で推移していることから、低調であった前年並と予測される。

日向灘では、2010年以降、今期の漁獲対象は沿岸発生群主体の0歳魚となっている。0歳魚の漁獲量は、前年7月～12月の宮崎県まき網漁獲量および1月～6月の宮崎県北中部シラス漁獲量の相乗平均値と正の

関係にあり、この予測値が前年の宮崎県の漁獲量を上回ることから、来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、0 歳魚が水揚げの主体であった 1 月～6 月の水揚量が前年を下回ったものの、6 月以降は沖合を中心に大型個体も漁獲されていることから、来遊量は前年を上回ると予測される。ただし、操業隻数の減少から、漁獲量に反映されない可能性がある。

豊後水道東側では、周辺海域で発生したと推定される被鱗体長 10 ㎝以下の 0 歳魚が漁獲の主体となる。カタクチシラスの水揚量およびまき網での水揚量が前年同期を大幅に下回ったことから、来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾では、期を通じて 0 歳魚、1 歳（2022 年級群）以上が漁獲の対象となる。上半期（1 月～6 月期）の宿毛湾小型まき網における「かえり」銘柄の水揚量と下半期の中型まき網水揚量には有意な正の関係が見られる。上半期の宿毛湾小型まき網における「かえり」銘柄の水揚量とこの正の関係式から予測される下半期の中型まき網水揚量は前年を下回ることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域では、未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではない。

・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。

・魚体：10 ㎝以下の 0 歳魚主体に、10 ㎝以上の 1 歳以上が漁獲される。

(3) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：熊野灘では、例年、マイワシなどにわずかに混じって漁獲されることが多く、今期もまとまった来遊はないと予測される。

伊勢・三河湾、渥美外海では、ぱっち網の操業開始を遅らせることによって魚体重の大型化が図られるものの、内湾の資源量は前年より少ないと考えられる。また、7 月現在、内湾にシラスの漁場は形成されておらず、春、夏生まれのシラスが少ないことが推察され、それが成長して漁獲される秋冬期の漁獲量も限定的と考えられるため、前年を下回ると予測される。

相模湾西部では、例年、8 月以降の定置網への入網は僅かであり、さらに近年は資源量が少ないため予測は困難である。ただし、近年の 8 月～12 月は低調な水揚げが続いていることから、来遊量は低調であった前年並と予測される。

相模湾東部では、黒潮 A 型流路が継続している 2018 年以降、主要定置網の 8 月～12 月漁獲量は数トンのレベルに留まっている（秋季に一時的に B 型となった 2020 年を除く）。JCOPE2M による黒潮長期予測（7 月 5 日発表）によると、大蛇行は少なくとも 9 月まで継続すると予測されており、今期も近年同様の不漁傾向が継続すると考えられる。以上のことから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。

・魚体：10 ㎝以下の 0 歳魚主体に、10 ㎝～14 ㎝の 1 歳以上が漁獲される。

(4) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総・常磐海域では、前年漁期（前年 11 月～6 月）の小型成魚が翌年漁期に大型成魚となって再来遊すると考えられている。房総海域では、近年は 0 歳魚（2023 年級群）を主体に 1 歳魚（2022 年級群）が混じる。0 歳魚は、期後半に漁獲され、8 月を中心に遠州灘周辺海域で発生する加入群に由来すると考え

られるが、現時点でその情報がないため、来遊量の予測は困難である。1歳魚は例年8月以降に北上し、漁期中はほとんど漁獲されなくなるが、2023年は7月下旬現在もまとまって漁獲されている。北上開始時期の遅れなどの影響があれば、期前半にまとまって漁獲される可能性がある。沖合回遊群の資源量は増加傾向にあると考えられるが、1そうまき網の漁獲対象になりにくく、八戸、犬吠埼周辺〜外房海域での2そうまき網による漁獲が主体となると考えられ、全体としては低調であった前年並〜上回ると予測される。

三陸南部海域では、9 ㎝〜12 ㎝の1歳魚が漁獲の主体で、0歳魚も漁獲される。今期は黒潮続流の波及による暖水の影響が強く、5月及び6月の来遊が前年の値を大きく上回り、また、千葉県の2そうまき網漁業が3月以降好調で、その群が8月〜9月に来遊し、漁獲対象となることが見込まれるため、前年を上回ると予測される。

三陸北部海域では、近年の資源状態及び漁獲動向から、定置網ではほとんど漁獲されない。まき網は、沖合回遊群が増加傾向にあることから、低調であった前年を上回ると予測される。

道東海域では、カタクチイワシは2010年代の釧路水産試験場による調査船調査では殆ど漁獲されなかったが、2021年漁期中調査（流し網）の平均CPUEが15年ぶりに1000（尾/回）を超えたほか、2022年5月調査（表中層トロール）の平均CPUEが過去最多となる549（尾/h）を記録した。また、2023年5月調査においても200（尾/h）を超える漁獲があった。これらのことから、来遊量は2021年以降増加傾向にあると推測される。しかし、マイワシの来遊量が依然として多く、カタクチイワシは漁業の主対象種とはならないと予測される。

・漁期・漁場：房総海域と三陸北部海域の 2 そうまき網および三陸南部海域の定置網は期を通じて漁獲される。資源量が多い年には、道東海域のまき網では8月〜10月に、房総・常磐海域の1そうまき網では12月以降に漁場が形成されていたが、資源量の少ない近年は主な漁獲対象にはならない。

・魚体：6 ㎝〜11 ㎝の0歳魚、7 ㎝〜14 ㎝の1歳以上が漁獲される。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2023 年 8 月～12 月）
対象海域：北薩～熊野灘
対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣
対象魚群：0 歳魚（2023 年級群）、1 歳（2022 年級群）以上。
年初に加齢。魚体は被鱗体長。
(1) 来遊量： 全体として前年を上回る。紀伊水道外域では前年並。
(2) 漁　期：期を通じて漁獲される。
(3) 魚　体：0 歳魚（8 ㎝～20 ㎝）が主体となる。海域により 1 歳以上（20 ㎝以上）も対象となる。

漁況経過（2023 年 1 月～6 月）および見通し（2023 年 8 月～12 月）についての説明

1. 資源状態

太平洋および瀬戸内海における漁獲量（農林統計）は、2015 年に 4.9 万トンと過去最高となったが、2016 年以降から減少傾向に転じ、2020 年には 2.4 万トンとなった。2021 年に 3.9 万トンと一時的に増加したが、2022 年の漁獲量暫定値は 2.2 万トンであった。卵稚仔調査で得られる卵密度データを標準化した資源量指標値（平均値を 1 とする相対値）は、2016 年に 1.79 と過去最高となり、2017 年～2019 年はやや減少したものの 1.36～1.64 と比較的高い水準で推移した。しかし、2020 年では 0.84、2021 年では 0.77 と近年減少傾向にある。2022 年度資源評価において、本系群の資源は減少傾向にあると判断されている。

2023 年の資源量指標値は未推定であるが、資源量指標値の基礎となる太平洋および瀬戸内海（海区Ⅰ～海区Ⅲ、海区Ⅶ）の産卵量（前年 9 月～当年 8 月を 1 年とする）は、2016 年～2022 年にかけて減少傾向を示しながら 38 兆粒～205 兆粒の間で推移している。2022 年 9 月～2023 年 6 月の産卵量は 30 兆粒であり、前年同期（2021 年 9 月～2022 年 6 月、38 兆粒）を下回り、過去最低値となっている。以上のことから、親魚資源は依然低い水準にあると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

例年の傾向から、2023 年後期（8 月～12 月）の漁況は 0 歳魚（2023 年級群）が主体になると推測される。予測対象海域（鹿児島県～三重県）の主要港における前期（1 月～6 月）水揚量と後期水揚量には正の関係がある。2023 年前期の水揚量は 5,089 トンであり、前年同期（4,078 トン）を上回った。2000 年～2022 年の前期水揚量と後期水揚量との関係を用いて、2023 年前期の水揚量から 2023 年後期の水揚量を予測すると 10,259 トンとなる。この値は 2022 年後期の水揚量 15,460 トンを下回る。しかし、近年の実測値は予測値を上回る傾向がみられている。

北薩～薩南海域では、0 歳魚、1 歳魚（10 ㎝～17 ㎝）が漁獲対象となる。4 月～6 月のまき網における 1 歳魚の漁獲量、棒受網における 0 歳魚の漁獲量が前年を上回って推移したことから、今期の来遊水準は前年を上回ると考えられる。

日向灘では、0 歳魚、1 歳魚（11 ㎝～20 ㎝台）が主体となる。0 歳魚の漁況と、指標値（鹿児島県まき網 1 月～5 月漁獲量、愛媛県まき網 4 月～6 月漁獲量の相乗平均）との間に正の関係が認められ、2023 年の予測値が前年を上回っていることから、今期下半期のウルメイワシの漁獲量は前年を上回ると予測される。

豊後水道西側南部では、8 月～10 月は 0 歳魚（10 ㎝～20 ㎝）が主体となる。4 月～6 月のまき網水揚量が前年を上回ったことから、今期の来遊水準は前年を上回ると予測される。

豊後水道東側南部では 0 歳魚が主体となる。加入時期にあたる 4 月～6 月と当歳魚が水揚げの主体となる 8 月～12 月において、両期間の水揚量には正の相関関係が認められる。この関係から判断すると今期の

来遊水準は前年同期を大きく上回ると予測される。

宿毛湾では、0 歳魚、1 歳魚が漁獲される。宿毛湾の中型まき網における前期水揚量と 8 月～12 月の水揚量との間には正の関係が認められ、この関係から今期の来遊水準は前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、年間を通じて成魚を漁獲対象とする漁業が少ないため、漁況から来遊水準を判断することは難しいが、近年の漁獲傾向及び黒潮の離岸状況から、前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、1 そうまき網でのウルメイワシの漁獲は近年無い。2023 年 4 月～6 月の棒受網は前年を下回った。これらのことから、8 月～12 月の漁獲は前年並と予測される。

熊野灘では 0 歳魚（8 ㎝～20 ㎝）が主体となり 1 歳以上（18 ㎝以上）も漁獲される。2023 年は定置網における 5 月、6 月の漁況が 0 歳魚主体に前年を上回っているため、今期の来遊水準は前年を上回ると予測される。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し　(2023 年 8 月～12 月)

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾
対象漁業：まき網、定置網
対象魚群：0 歳魚（2023 年級群）、1 歳魚（2022 年級群）、
2 歳魚（2021 年級群）、3 歳（2020 年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1.北薩～土佐湾（まき網、定置網）
（1）来遊量：北薩～薩南海域では前年を下回る。日向灘では前年を下回る。豊後水道南部西側では前年並。豊後水道東側では前年並～下回る。宿毛湾・土佐湾では前年を上回る。
（2）魚　体：北薩～薩南海域では 0 歳魚、1 歳魚主体。日向灘、豊後水道では 0 歳魚が主体。宿毛湾・土佐湾では 0 歳魚、1 歳魚が主体。0 歳魚は 19 ㎝以下、1 歳魚は 19 ㎝～25 ㎝、2 歳以上は 23 ㎝以上。

2.紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）
（1）来遊量：紀伊水道外域西部では前年並。紀伊水道外域東部では前年を下回る。熊野灘では前年並。
（2）魚　体：紀伊水道外域西部では 0 歳魚主体。紀伊水道外域東部では 0 歳魚、1 歳魚主体。熊野灘では 1 歳魚主体に 0 歳魚および 2 歳以上が混じる。0 歳魚は 19 ㎝以下、1 歳魚は 19 ㎝～25 ㎝、2 歳魚は 23 ㎝～27 ㎝、3 歳以上は 25 ㎝以上。

3.相模湾（定置網）
（1）来遊量：伊豆東岸では前年を大きく上回る。西湘では前年を上回る。
（2）魚　体：主体となる 0 歳魚は 19 ㎝以下、1 歳魚は 19 ㎝～22 ㎝。

漁況の経過（2023 年 1 月～6 月）および見通し（2023 年 8 月～12 月）についての説明

1. 資源状態

資源量は 1986 年以降増加し、1990 年代半ばは 15 万トン～16 万トンと高い水準で推移したが、1997 年以降減少した。2009 年～2013 年は横ばいで推移したが、その後再び減少している。加入量は 1993 年をピークに減少し、2009 年以降 2.6 億尾～7.1 億尾と低い水準で推移している。令和 4 年度（2022 年度）資源評価において、2021 年の資源量は 5.0 万トン、親魚量は 2.7 万トンと推定された。

2020 年級群（3 歳魚）の加入量は 3.7 億尾と推定され、2022 年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ない。

2021 年級群（2 歳魚）の加入量は 4.0 億尾と推定された。低水準ながら 2022 年前半の漁獲の主体となったが、2022 年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。

2022 年級群（1 歳魚）は、0 歳魚時（2022 年 1 月～12 月）の漁獲尾数は 132 百万尾と、前年同期（90 百万尾）を上回り、1 歳魚時（2023 年 1 月～6 月）の漁獲尾数（主要港集計、暫定値）も 32 百万尾と、前年同期（主要港集計、18 百万尾）を上回った。加入量の指標となる 0 歳魚時の漁獲状況は、宮崎県南部定置網アジ仔 CPUE（2022 年 4 月～6 月）、伊勢湾小型底びき網（まめ板）当歳魚漁獲量（2022 年 4 月～2023 年 3 月）において前年を上回ったが、千葉県定置網当歳魚漁獲量（2022 年 10 月～2023 年 3 月）では前年並、宇和島港まき網ゼンゴ CPUE、宿毛湾まき網ゼンゴ CPUE、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量（いずれも 2022 年 4 月～2023 年 3 月）、串本棒受網当歳魚漁獲量（2022 年 5 月～6 月）では前年を下回った。加入量指標値は 2021 年級群を下回るものの、漁獲尾数が大きく増えていることから 2022 年級群の加入量は前年を上回ると考えられる。

2023 年級群（0 歳魚）は、2023 年 1 月～6 月の漁獲尾数（主要港集計、暫定値）は 12 百万尾と、前年同期（主要港集計、8 百万尾）を上回った。各県地先の 0 歳魚の漁獲状況を 4 月～6 月で比較すると、宇和島

港まき網ゼンゴCPUE、宿毛湾まき網ゼンゴCPUE、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量は前年を上回ったが、宮崎県南部定置網アジ仔CPUE、伊勢湾小型底びき網（まめ板）当歳魚漁獲量、串本棒受網当歳魚漁獲量（5月～6月）は前年を下回った。現時点での見積もりは不確実であるが、2023年級群（0歳魚）の加入量は2022年級群並か下回る水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚（2023年級群）：19 ㎝以下、1歳魚（2022年級群）：19 ㎝～25 ㎝、2歳魚（2021年級群）：23 ㎝～27 ㎝、3歳（2020年級群）以上：25 ㎝以上。3歳以上の年齢に対応した体長区分は現状では困難である。なお近年の報告によると、相模湾以東では尾叉長20 ㎝台に3歳から10歳以上の高齢魚がみられることが明らかになってきている。したがって相模湾については報告された年齢体長キーから判断し、0歳魚：19 ㎝以下、1歳魚：19 ㎝～22 ㎝ とした。

（1）北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、0歳魚、1歳魚（2023年級群、2022年級群）が漁獲の主体となる。2023年5月～6月の中型まき網における0歳魚、1歳魚（豆、仔銘柄）の水揚量が前年を下回っていることから、今期（8月～12月漁期）も前年を下回ると考えられる。

日向灘では、0歳魚が漁獲の主体となる。0歳魚の漁獲量は日向灘南部大型定置網アジ仔CPUE、宇和海中部まき網漁獲量、大分県まき網漁獲量を用いた指標値と正の関係が認められ、この関係から判断して今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、漁獲の主体となるのは2023年級群（0歳魚）である。2023年級群が水揚げの主体となる2023年4月～6月のまき網水揚量は前年を上回ったが、近年、低調な漁獲が続いているため、前年並と予測される。

豊後水道東側では、0歳魚が漁獲の主体となる。5月～6月と8月～12月の漁獲量には正の関係が認められ、この関係から判断して今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では0歳魚(2023年級群)、1歳魚(2022年級群)が主体となる。中型まき網で0歳魚の来遊が前年より多いことから、来遊量は前年を上回ると考えられる。

（2）紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、0歳魚（2023年級群）が主体で漁獲されると考えられる。2023年1月～6月の漁獲量は前年同期を上回った。近年の漁獲傾向および黒潮の離岸状況から、下半期も来遊には期待できないため、前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、0歳魚（2023年級群）、1歳魚（2022年級群）が主体で漁獲されると考えられる。2023年1月～6月の漁獲状況は、前年を下回り、4月～6月に漁獲されなかったことから、期間前半の漁獲量も少ないと考えられる。潮岬沖の黒潮の離岸状況次第で、来遊および漁場形成条件が好転する可能性はあるが、前年を下回ると予測される。

熊野灘では、前期のまき網の漁況から1歳魚（2022年級群）の来遊量は前年を上回るが、0歳魚（2023年級群）については定置網の漁況から前年を下回ると考えられる。以上総じて、前年並と予測される。

（3）相模湾

伊豆東岸では、0歳魚（2023年級群）が漁獲の主体となる。1月～6月の漁獲尾数と7月～12月の漁獲尾数の関係式から来遊量は前年を大きく上回ると予測される。

西湘では、0歳魚（2023年級群）と1歳魚（2022年級群）が漁獲される。1月～6月の0歳魚漁獲量と7月～12月のマアジ総漁獲量には一定の関係性が認められており、この関係から判断して前年を上回ると予測される。

（4）房総以北の漁獲情報

房総～鹿島灘海域における北部まき網の2023年1月～6月の漁獲量は359トン（TACシステム）と、極めて低調であった前年同期35トンを上回った。今期の予測期間中、1そうまきはマイワシ、サバ、スルメ

イカを対象とした三陸海域以北での操業が中心となり、マアジは漁獲の主な対象とならない。
　仙台湾以北では、宮城県の2023年1月～6月の漁獲量は94トンと前年を上回ったが、岩手県の2023年1月～6月の定置網による漁獲量は10トンと前年を下回った。青森県では2023年1月～6月の漁獲量は3トンとなり、前年を下回った。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2023年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域
対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい等
対象魚群：0歳魚（2023年級群）、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）、3歳魚（2020年級群）、4歳魚（2019年級群）、5歳魚（2018年級群）、6歳（2017年級群）以上。
年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）
(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバを主体とするサバ類全体としては前年並～上回る。
(2) 漁　期：期を通じて漁獲される。
(3) 魚　体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、北薩～薩南海域では20 cm～36 cm（0歳魚～3歳魚）主体、日向灘～豊後水道南部では20 cm～32 cm（0歳魚、1歳魚）主体、土佐湾では30 cm～38 cm（3歳魚～5歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）
(1) 来遊量：マサバを主体とするサバ類全体としては前年を下回る。
(2) 漁　期：期を通じて漁獲される。
(3) 魚　体：マサバが主な漁獲対象となり、27 cm～31 cm（1歳魚、2歳魚）主体に20 cm～25 cm（0歳魚）も漁獲される。

3. 熊野灘（まき網、定置網）
(1) 来遊量：マサバ、ゴマサバともに低水準。
(2) 漁　期：期を通じて漁獲される。
(3) 魚　体：マサバ、ゴマサバともに30 cm～35 cm（1歳以上）主体に15 cm～25 cm（0歳魚）も漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）
(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。ゴマサバ全体としては低調であった前年並～下回る。サバ類全体としては低調であった前年並～下回る。
(2) 漁期・漁場：期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、三宅島周辺海域、銭洲海域にも漁場が形成される。
(3) 魚　体：ゴマサバは29 cm～37 cm（2歳魚、3歳魚）主体に、24 cm～27 cm（1歳魚）および33 cm以上（4歳以上）も漁獲される。

5. 犬吠埼沖～三陸海域、道東海域（まき網、定置網、底曳網）
(1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年並。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年を下回る。5歳魚は前年を上回る。6歳魚は前年並。マサバ全体としてはまき網では低調であった前年並、定置網では前年を下回り、底曳網では前年並。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては低調であった前年並。
(2) 漁期・漁場：定置網、底曳網では期を通じて漁獲される。まき網漁場は、8月～10月は道東～三陸北部海域、11月～12月は三陸北部～常磐海域に主に形成される。
(3) 魚　体：マサバは25 cm ～36 cm（3歳以上）主体に、18 cm ～32 cm（1歳魚、2歳魚）も漁獲される。

漁況の経過（2023 年 1 月～6 月）および見通し（2023 年 8 月～12 月）についての説明

1.　資源状態

1）マサバ

資源量は 1990 年代～2000 年代前半に極めて低い水準にあったが、2013 年以降の加入量水準の高い年級群の発生により増加傾向を示し、2018～2021 年の資源量は、資源量を推定している 1970 年以降で最高水準となっている。2013 年級群以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2017 年級群（6 歳魚）は、2022 年 12 月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が 106 億尾と近年（2012～2021 年）の平均（107 億尾）程度の水準である。

2018 年級群（5 歳魚）は、推定加入量が 149 億尾と近年の平均を上回る水準である。

2019 年級群（4 歳魚）は、推定加入量が 53 億尾と近年の平均を下回る水準である。

2020 年級群（3 歳魚）は、推定加入量が 92 億尾と近年の平均程度の水準である。

2021 年級群（2 歳魚）は、推定加入量が 131 億尾と近年の平均を上回る水準である。

2022 年級群（1 歳魚）の加入量は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6 月～7 月）、北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所、9 月～10 月）および再生産関係から、近年の平均程度の水準と推定されている。

2023 年級群（0 歳魚）は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査における出現率が 45%であり、昨年の同調査よりやや低い値であることから、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、近年の平均を下回る水準と見込まれる。

2）ゴマサバ

資源量は 2004 年～2011 年に高い水準にあったが、2011 年以降、減少傾向を示し、2021 年の資源量は、資源量を推定している 1995 年以降で最低水準となっている。

2018 年級群（5 歳魚）は、2022 年 12 月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が 2.6 億尾と近年の平均（3.8 億尾）を下回る水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2019 年級群（4 歳魚）は、推定加入量が 1.8 億尾と近年の平均を下回る水準である。

2020 年級群（3 歳魚）は、推定加入量が 2.4 億尾と近年の平均を下回る水準である。

2021 年級群（2 歳魚）は、推定加入量が 1.4 億尾と近年の平均を大きく下回る水準である。

2022 年級群（1 歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均を下回る水準と推定されている。

2023 年級群（0 歳魚）は、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、宿毛湾以西の漁況が比較的好調に推移していることから、近年の平均を上回る水準と見込まれる。

2.　来遊量、漁期・漁場、魚体

1）マサバ

（1）来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0 歳魚（2023 年級群）は、これまで得られている情報から加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。1 歳魚（2022 年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年並。2 歳魚（2021 年級群）は、加入量が近年の平均を上回る水準と考えられ、来遊量は前年を上回る。3 歳魚（2020 年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。4 歳魚（2019 年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。5 歳魚（2018 年級群）は、加入量が近年の平均を上回る水準であり、来遊量は前年を上回る。6 歳（2017 年級群）以上の来遊量は前年並。全体の来遊量は前年並となる。資源評価では資源水準は依然として高いと推定されているが、2022 年の秋以降、黒潮続流の顕著な北偏が継続しているため、特に犬吠埼以北海域のまき網で極めて低調な漁況が継

続している。魚群の南下は 2022 年と同様に極めて遅れる可能性があることから、マサバの来遊量は犬吠埼以北海域のまき網では低調であった前年並、三陸海域の定置網では前年を下回り、三陸海域の底曳網では前年並となる。伊豆諸島周辺海域以西への来遊量は低水準となる。

（2）漁期・漁場、魚体

1 月～6 月の漁獲量は、犬吠埼以北海域のまき網は 8.0 千トン（前年同期実績 34.0 千トン）、犬吠埼以北海域の定置網、底曳網等は 18.4 千トン（同 28.6 千トン）、伊豆諸島周辺海域のたもすくい・棒受網は 0.6 千トン（同 1.4 千トン）、伊豆半島～駿河湾～熊野灘のまき網・定置網は 1.4 千トン（同 13.5 千トン）、紀伊水道外域～北薩海域の全漁業では 2.1 千トン（同 6.5 千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

1 月～6 月の魚体は次のとおりであった。犬吠埼以北海域のまき網では、22 cm～25 cm の 1 歳魚、2 歳魚が主体に、25 cm～37 cm の 3 歳以上も漁獲された。三陸海域の定置網では、1 月～3 月は 20 cm～25 cm の 1 歳魚、2 歳魚が主体に、4 月は 20 cm～32 cm の 1 歳魚～5 歳魚が主体に、5 月以降は 30 cm～37 cm の 3 歳以上が主体に漁獲された。三陸海域の底曳網では、1 月～4 月は 20 cm～25 cm の 1 歳魚、2 歳魚が主体に漁獲され、5 月以降は 32 cm～37 cm の 4 歳以上が主体に漁獲された。産卵場である伊豆諸島周辺海域では主に伊豆諸島北部海域が漁場となり、28 cm～40 cm の 3 歳魚～9 歳魚が主体に漁獲された。駿河湾～北薩海域では、伊豆諸島周辺海域と同様の組成に加え、30 cm 以下の 0 歳魚～2 歳魚も漁獲された。

本予測期間は、犬吠埼以北海域のまき網、定置網、底曳網での漁獲が中心となり、3 歳以上が主体に 1 歳魚、2 歳魚も漁獲される。まき網漁場は 8 月～10 月は道東～三陸北部海域に、11 月～12 月は三陸北部～常磐海域に形成されるが、魚群の南下は 2022 年と同様に極めて遅れる可能性がある。三陸海域の定置網、底曳網では期を通じて断続的に漁獲される。

伊豆諸島周辺海域以西への来遊量は低水準ではあるが、熊野灘、紀伊水道外域では 1 歳以上主体、豊後水道南部、日向灘では 0 歳魚、1 歳魚主体に、一時的にまとまった漁獲がみられる。

漁獲の主体となる犬吠埼以北海域の年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1 歳魚：18 cm～30 cm 前後、2 歳魚：22 cm～32 cm 前後、3 歳魚：25 cm～36 cm 前後、4 歳魚：28 cm～38 cm 前後、5 歳魚：30 cm～39 cm 前後、6 歳以上：32 cm 以上。0 歳魚は伊豆諸島以西で主に漁獲され、例年の傾向から 15 cm～25 cm 前後と予測される。（各年齢の体長の範囲は広く重なり合っている）

2）ゴマサバ

（1）来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0 歳魚（2023 年級群）は、直近までの漁況を考慮すると加入量が近年の平均を上回る水準と考えられ、来遊量は前年を上回る。1 歳魚（2022 年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は低調であった前年を上回る。2 歳魚（2021 年級群）は、加入量が近年の平均を大きく下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。3 歳魚（2020 年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は低調であった前年を上回る。4 歳（2019 年級群）以上は残存資源量が少なくなっており、漁獲の主体とならない。ゴマサバの来遊量は、北薩～薩南海域、日向灘、豊後水道南部、土佐湾では低調であった前年並～上回り、伊豆諸島周辺海域では低調であった前年並～下回る。紀伊水道外域、熊野灘、犬吠埼以北海域では混獲される程度にとどまり、全体としては低調であった前年並～上回るものの、低水準の来遊量となる。

（2）漁期・漁場、魚体

1月～6月の漁獲量（全漁業）は、北薩～紀伊水道外域は14.8千トン（前年同期実績6.2千トン）、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は 4.2 千トン（同 3.6 千トン）、犬吠埼以北海域は 0.8 千トン（同 2.7 千

トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

1 月～6 月の漁獲の主体は、北薩～薩南海域では 0 歳魚～3 歳魚、日向灘～豊後水道南部では 0 歳魚、1 歳魚、紀伊水道海域では 2 歳魚～4 歳魚、熊野灘では 1 歳魚～3 歳魚、伊豆諸島周辺海域では 2 歳魚、3 歳魚、犬吠埼～三陸海域では 3 歳魚～5 歳魚であった。

本予測期間における各地の漁期・漁場と魚体は、北薩～薩南海域では 0 歳魚～3 歳魚主体、日向灘～豊後水道南部では 0 歳魚、1 歳魚主体、土佐湾では 3 歳魚～5 歳魚主体、熊野灘では 1 歳以上主体に、それぞれ期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、伊豆諸島北部海域を中心に 2 歳魚、3 歳魚主体に 1 歳魚、4 歳以上も混じり期を通じて漁場が形成されるが、黒潮流路によっては三宅島周辺海域、銭洲海域にも漁場が形成される。犬吠埼以北海域のまき網、底曳網では混獲される程度にとどまり、定置網では一時的にまとまった漁獲がみられる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。0 歳魚：20 ㎝～25 ㎝前後、1 歳魚：25 ㎝～32 ㎝前後、2 歳魚：27 ㎝～34 ㎝前後、3 歳魚：29 ㎝～37 ㎝前後、4 歳以上：32 ㎝以上。（各年齢の体長の範囲は広く重なり合っている）

参　画　機　関

地方独立行政法人　北海道立総合研究機構
　　水産研究本部　釧路水産試験場
　　　　　　　　　函館水産試験場

地方独立行政法人　青森県産業技術センター
　　水産総合研究所

岩手県水産技術センター

宮城県水産技術総合センター

福島県水産海洋研究センター

茨城県水産試験場

千葉県水産総合研究センター

東京都島しょ農林水産総合センター

神奈川県水産技術センター

静岡県水産・海洋技術研究所

愛知県水産試験場
　　漁業生産研究所

三重県水産研究所

地方独立行政法人
　大阪府立環境農林水産総合研究所
　　水産研究部　水産技術センター

和歌山県水産試験場

徳島県立農林水産総合技術支援センター
　　水産研究課

高知県水産試験場

愛媛県農林水産研究所　水産研究センター

大分県農林水産研究指導センター
　　水産研究部

宮崎県水産試験場

鹿児島県水産技術開発センター

一般社団法人　漁業情報サービスセンター

（取りまとめ機関）
国立研究開発法人 水産研究・教育機構
　　　水産資源研究所